

## 石橋湛山と現実主義 ——立正大学の視点から——

立正大学 早川 誠

ジャーナリストとしても政治家としても多面的な活躍を見せた石橋湛山だが、日蓮宗や立正大学との関わりからその活動を論じた業績は、相対的には少ないと言えるだろう。だが、幼少時からの教育は、父である杉田堪誓や望月日謙（ともに日蓮宗大学・立正大学の学長経験者であり、身延山久遠寺法主となる）といった日蓮宗の重鎮によって与えられたものである。また、日蓮の『開目抄』に記された三大誓願「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」は、石橋の常日頃からの心構えでもあった。

こうした日蓮宗の素養は、確かに、必ずしも石橋の政治的・経済的な発言や論考に直接反映されているわけではない。大学時代に学んだプラグマティズムや、独学で習得したケインズなどの経済学の知識も、石橋の価値観や思考方法に大きく影響しているからである。とはいえ、石橋の思考のパターンにその痕跡をたどることも不可能ではない。本報告では以下の二つの道筋で、石橋の思考の枠組みを明らかにすることを試みたい。

第一に、日蓮宗との思想的あるいは経歴面でのつながりを媒介として、石橋が育まれた時代の思想状況を考察する。石橋が生まれ育った時代は、日蓮宗でも近代的な教育制度が構築されていく変革期であった。父・堪誓や日謙もこの変革期に主要な役割を果たしている。早稲田大学出身者が日蓮宗の教育改革に与えた影響も大きい。この変革の歴史的潮流を背景とすることで、ジャーナリスト・政治家以前の石橋の思想の形成過程に、異なる角度から光を当ててみたい。

第二に、大学人・教育者としての石橋の行動をヒントとして、現実主義な思考様式を抽出することを試みたい。報告者の専門は政治思想・政治理論であるが、当該分野において石橋は「リベラル」とされ、言論の自由の擁護や平和主義的な主張を評価されることが多い。だが、その根底には現実に対する鋭い観察眼と、冷静な判断力があつた。金解禁などの経済論争でも国際金融制度への厳しい評価が背景にあり、また戦後の首相退任も、単に潔かったというだけではなく、議会運営に関する一定の見識に基づいたものである。

「理想主義的なリベラル」は、現代日本の論壇においても少なくないかもしれない。しかし石橋の場合、客観的な現実認識を貫いた上でなおかつリベラルであったことが特徴的と言える。こうした「事実認識における現実主義」と「政策論におけるリベラリズム」の組み合わせは、現代日本において、もっとも必要とされる政治家・経済人としての資質なのではないだろうか。